

Newsletter

12月号は、p.1-3『川歩き、横浜見学、そして山の学校』、p.3-5『6年生 奈良歴史旅行 一期一会の出会いの旅』、p.6『マルティン祭』、p.7『学期祭』のトピックでお届けします。

川歩き、横浜見学、そして山の学校

5年生担任 島田 順子

島田クラスは、4年生の11月に、郷土学の学びで新治の森から水の行方をたどって、梅田川、恩田川、そして鶴見川の川沿いの道を歩きました。海まであと18キロメートルの鴨池人道橋で川歩きをいったん終了しました。自分たちの町、霧が丘から、緑区、そしてその先の土地や海まで想像を広げていきました。絵地図を自分で作成することで、実際に歩いた道のりが、地図の上ではどこに当たるかがはっきり分かり、後の学習で、緑区の地図に夢中になりました。歩いた場所と、抽象的な地図が、子どもたちの頭の中でしっかりと一致したからです。

3学期には横浜の簡単な歴史を学びました。地理が土地の横の広がりとすると、歴史は奥行きです。海に細長く突き出た砂州とよばれる場所が、横浜の始まりであること、人々が増えるにしたがって生活が大変になったこと、砂州にかこまれた海が田んぼであったなら、との願いを受けて、吉田新田が作られたことをまず、教室で学びました。実際に横浜見学に出かけ、砂州であった証拠の地形を確認し、吉田新田が今やたくさんの建物を抱える横浜の重要な地区になっていることを、小高い丘から見渡すことができました。霧が丘、緑区と広がってきた子どもたちの頭の中の地図が、横浜市という大きさまで広がっていました。

5年生になって、日本地理のエポックの始めの学びは、再び川歩きの体験です。今度は、神奈川県という広がりを学びます。川は、県のほぼ中心から海まで流れている、相模川を選びました。本厚木駅からほど近い川土手から、河口までの約14キロメートルを6時間かけて歩きました。二つの高速道路をくぐり、新幹線の線路をくぐり、たくさんの橋をくぐったり超えたりしました。川は次第に幅が広くなり、河口に近くなるにつれ、川風が激しくなり、海が近付いていることを感じました。神奈川県のほぼ中央から河口までの約14キロメートルが、子どもたちの心と体の中に、風景とともに、体験とともにしつかり入り込んだようでした。その後の神奈川県の地理の学びの時に、抽象的な地図を見るとき、大体このぐらい、と距離の検討をつけながら見ることができるようになりました。このことは、地理の学びの基礎となったと思います。どんな地図を見ても、神奈川県と大きさを比べれば、このぐらい、と検討をつけられるからです。

そして2学期になり、いよいよ山の学校が近付いてきました。5年生の子どもたちにとって初めての宿泊行事。期待と不安の中、計画が進んでいきました。神奈川県の北部、愛甲郡相川町半原にある、「愛川ふれあいの村」に宿泊を予定し、いろいろな活動を計画しました。

まず、野外炊事とキャンプファイヤーのことを語らないわけにはいきません。一日目の野外炊事、二日目のキャンプファイヤー、どちらも山の学校の醍醐味です。

野外炊事では、カレーとご飯を作りました。林の手前にある炊事場で、ふれあいの村のスタッフの方から簡単な説明を受け、4つの班ごとに準備を開始しました。薪に火のつくのが早いこと！どの班も、あっという間にかまどにぼうぼう火が燃え始めました。かまどの管理をする人、野菜を切る人、ご飯を炊く人…と班の中で分担して、ほかの仕事も手伝いながら助け合って、あっという間においしいカレーライスができました。食べたらすぐ、今度は片付けです。真っ黒になった鍋を、手分けしてごしごし洗いました。林の辺りから夕闇が迫ってくる頃、ようやく片付けが終わり、炊事場を後にしたのでした。



山の学校の準備は、主にキャンプファイヤーの準備をしてきたようなものでした。9月に入ると、毎日の朝のリズムの時間に、キャンプの歌や踊りを一曲ずつ覚えていったからです。子どもたちの心は当日に向けて、少しずつ盛り上がっていったのです。

本番のキャンプファイヤーは、薄暗くなってきたファイヤー場で、薪がパチパチはじける中、行われました。赤々と燃える薪を前にして、歌い踊り続けました。クラ

イマックスは、学園に代々伝わるあの音頭です。火の粉が飛んでくる中、男子も女子も、先生も子どもも、夢中になって歌い踊りました。薪がだんだん小さくなってしまっても、子どもたち一人ひとり、様々な思いに浸りながら、薪を見つめ、あたりはすっかり暗く、夜になっていきました。明日も明後日もずっとここにいたい、と口々に言い合う子どもたちです。山の学校で一日過ごし、二日過ごすうちに、山の生活にすっかりなじんで、いつまでもこの仲間とともに過ごせそうな気持ちに、子どもたちも、また私自身もなっていました。たった三日間とは思えない、何かがぎっしり詰まった、濃い時間でした。



ふれあいの村のある愛川町半原はかつて、ねん糸業（細い糸を束ねて撚り、丈夫な一本の糸にする仕事）が盛んに行われてきたところです。山間の盆地で作物が育ちにくかったことで、養蚕業を始めたのが発端でした。町の真ん中を中津川が流れる半原の空気は一年を通して湿り気が多く、養蚕や絹糸を扱う仕事にぴったりだったそうです。

とてもよい機会なので、半原の町の歴史をみんなで感じてみたいと思いました。そこで、以前横山先生が作られた、劇「半原村ねん糸業始まり物語」の台本をお借りし、少し手直しをして、出かける前に配りました。半原村という地名も、ねん糸業という言葉も、初めて聞く子どもたちです。でも、台本のですから子どもたちは一つのお話として受け止めました。

バスが半原に近づいたとき、川を見つけた子どもたちが、「中津川だ！」

と叫びました。台本を読んだだけの子どもたちですが、半原の土地と歴史がお話をともに体に入っていて、「中津川」という川の看板を見たとき、お話を内容と、目の前に流れる川とがぴったり結びついたのだと思います。

また二日目に、「愛川繊維会館レインボープラザ」に行った時のことです。はたおり体験の前に、工場の見学をしました。工房に入ると、ねん糸の機械が置いてありました。工房の方が案内し、説明をしてくださいました。「これは八丁式撚糸機と言つて…」



と話しが始められたとき、子どもたちの目はその機械に吸い寄せられていきました。そして口々に、「これがあの八丁式ねん糸機？」
「仕組みはどうなっているんだろう。」「水車とつながっていたはずだけど…」と話しが始めました。驚いたのは説明して下さった工房の方です。そこで、どうして子どもたちが八丁式ねん糸機を知っているのか、なぜこんなに興味をもって見ているのか、お伝えしました。半原村の撚糸業についての劇をやろうとしていること、台本の中にこの機械が出てきて、しかも重要な道具の一つであることを。この機械を桐生から導入した小島紋右衛門の話が出てくると、また子どもたちが湧きました。重要な役の一つで、やりたいと思っている子どももいたからです。工房の方は「私よりも、みなさんの方が半原やねん糸業についてよく知っているみたいです。その劇も見てみたいなあ。」と、感心して言ってくださいました。

午後は、宮ヶ瀬ダムへ向かいました。二日前に、歩くコースに熊が出たとの情報で、大人は戦々恐々とし、保護者の方々に呼び掛けて、付き添いの応援に来ていただきました。数名の保護者の皆さん方が、子どもたちを取り囲むように付き添ってくださり、何事もなくダムまで行くことができました。

宮ヶ瀬ダムの放流は、圧巻でした。水とはとても思えないような白いしぶきがかたまりとなってごうごう落ちてきます。子どもたちは、



「しぶきに当たりたい！」

と、あちらこちらと走り回りながら、たっぷりしぶきを浴びて体を湿らせ、満足気な様子でした。

ダムの上に上がるエレベータ通路の驚くほどの冷たさ、ダム上から見る宮ヶ瀬ダムの全景の広々とした様子、登ってきた場所を振り返り見降ろすと怖いぐらいの高さ、一つ一つが子どもたちにとって、とても印象深かったようです。また、ダムの働きが人々の生活にとって大切なものであること、でもその陰にはダムの底に沈んでしまった村の人たちの辛い悲しみがあることも、ダムを目の当たりにして心に残ったようです。

ダムの上部にある「水とエネルギー館」を見学したとき、床に大きく描かれた神奈川県地図を見て子どもたちは、住んでいるところや学校のある場所、行ったことのある沿岸部など確かめていました。そして中津川が、なじみ

深い相模川の上流の一つであることに改めて気づきました。新治の森で、崖からしみだしてきた水の行方を、海までと、山までと、ここまでたどってきたことを、感慨深く思いました。



6年生 奈良歴史旅行 一期一会の出会いの旅

6年生担任 長井 麻美

10月28日から30日までの二泊三日で6年生は歴史旅行を行ってきました。

「奈良旅行」と言えば、6年生としての学校生活中のメインイベントと言っても過言ではありません。子どもたちは出発の何週間も前から期待に胸を膨らませていました。主たる目的はもちろん、日本史のエポックで学んだ飛鳥・奈良時代の舞台となった地を訪ね、貴重な歴史的遺産に直に触れることです。しかし子どもたちにとってはそれだけではなく、クラスの仲間と寝食を共にすること、自由時間、鹿と戯れることなど、楽しみでたまらない事柄が満載で、彼らの気持ちを高揚させるのでした。

いよいよ奈良旅行の初日。新横浜駅に集合した一同は新幹線に乗り込み、待ちに待っていた奈良旅行のスタートを切りました。

さて、今回の報告文は旅行の全行程を辿るのではなく、この旅でわたしたちが体験できた貴重な2つの出会いに焦点を当てて綴っていこうと思います。

1日目の出会い

～雑華厳浄（ざっけごんじょう）と光明遍照（こうみようへんじょう）～

近鉄奈良駅に到着したのは午前10時ごろでした。わたしたちはすぐに東大寺に向かい、戒壇院から参拝しました。静かな庭に敷き詰められた砂利は鑑真和尚が中国

から日本に船で渡ってきたことを想起させるように大海原を表現しているそうです。次に東大寺で最も参拝者や観光客で込み合っている大仏殿に入っていました。授業で大仏造営の経緯は学んでいましたが、その圧倒的な大きさ、雄大さに子どもたちは息をのみました。大仏の本名（？）は盧舎那仏といい、この地球だけでなく宇宙全体を司る仏として千年以上前の人々の厚い信仰を集めていた仏様です。堂々としたお姿を見上げながら周囲を一周しました。もちろん、「大仏さまの鼻の穴」と同じ大きさと言われる柱の穴も全員無事通過しました。





大仏殿を出ると「お水取り」で有名な二月堂の境内に上がりました。そこから奈良の町が一望できます。毎年三月に行われる「修二会」に想いを馳せながら、修行僧たちが大松明を抱えて一気に駆け上がる階段を降りていきました。そして、お隣の法華堂（三月堂）を参拝しました。ほの暗いお堂の中には奈良時代に造られた仏像たちが立ち並んでいます。お堂の方から解説をしていただきました。人々の願いを聞き入れるためにあらゆる装備を施した「不空羈索観音」は、両手で小さな水晶玉を包んでいる、と告げられた子どもたちは目を凝らしてその水晶を見つけて

「あった、あそこに。」

と静かな歓声を上げていました。

こうして、二時間余りかけて東大寺をめぐった後は奈良公園で鹿と戯しながら（！？）お弁当を食べ、興福寺国宝館を拝観したあと「大佛館」にチェックインしました。

夕方、グループ毎の自由散策から帰ってきた子どもたちは夕食前にある女性と知り合う事になります。

その方は飯田むつみさんとおっしゃる方で、横浜シャイナー学園1期生以来、何度も東大寺参拝に同行してくださり、お寺の教えを分かりやすく話してくださいました。音楽家としての顔もお持ちで、日本に数台しかない珍しいフランスシターという楽器の演奏者でもあります。今回は、ご都合で演奏会はありませんでしたが、わたしたちのためにこの宿舎を訪ねてきてくれました。東大寺に縁の深いご出身であることから、東大寺の教えについてお話を伺いたい、とお願いしていました。「みなさんは、東大寺を参拝して、何が印象に残りましたか？」

と飯田さんから問いかけられると、子どもたちは「盧舎那仏の大きさ」「観光客が多くて」「広かった」と思い思いの感想を伝えました。

「そうですね。大仏様の大きさに圧倒されますね。あの大仏様はどんな仏様なのかといいますと・・・。」

飯田さんは生粋の奈良の方で、標準語を話されていましたが、柔らかく、穏やかな語り口の中に奈良の方らしい響きが感じられます。「土地の人」のお話に耳を傾け、盧舎那仏に込めた当時の人々の切なる願いについて伺い

ました。それが、「光明遍照」です。盧舎那仏の大きな慈悲の光は太陽のようにどこまでも遍（あまね）く照らしている。病気や争いごとなどで苦しんでいる世の中のすべての人々を分け隔てなく慈悲の光で包んでくださるのだから、大丈夫ですよ、という意味です。皆、神妙な表情でお話を伺っていました。

「もうひとつ、お伝えしたいことがあります。それは、東大寺の教えについてです。」

飯田さんは続けられました。

「東大寺は華厳宗のお寺さんですが、その教えは『雑華厳浄』といいます。」

これはどういう意味かと言うと、世の中は一つとして同じではない様々な花が清らかに咲いている野原のようなもので、どんな人にもそれぞれの美しさや清らかさがあり、そういう様々な人々が助け合っていくことが世の中を美しく彩ることになるのだということでした。

30分間ほどのお話をましたが、子どもたちは静かに耳を傾けていました。おののが今朝見た壮大な大仏や暗いお堂にたたずむほかの仏様たちの姿を思い出し、誰もが幸せになれるよう強い祈りを込めて当時の人々によって造られたのだということを改めて確認したことでしょう。このお話によって東大寺見学が完結したと感じました。

お別れの前に、お礼に音楽好きな飯田さんへ全員で『クム・デ・コレ』を歌いました。この歌の贈り物を飯田さんが大変喜んでくださったことは後にいただいたお手紙で知ることとなります。

2日目の出会い

～「じいちゃん」とともに歩いた飛鳥路～

2日目。早朝散歩で奈良公園の鹿たちとたっぷりと触れ合った後で、飛鳥へ向かいました。聖徳太子や中大兄皇子が活躍した時代の舞台となった飛鳥をバスと徒歩で巡ります。

今回は、飛鳥^{ときお}ででも特別な出会いがありました。奈良在住の吉村闘雄さんという方がわたくしたちに同行してくださるのです。この吉村さん、実はクラスの男子児童の祖父に当たる方で、前もって同行をお願いしていたのでした。



一行は飛鳥周遊バスに乗り、待ち合わせの場所である甘樺丘で降りました。バス停には吉村さんが笑顔で待っていました。孫である男の子はちょっと照れながら「じいちゃん」に目で挨拶をしていました。一同がご挨拶した後、吉村さんが先頭に立って甘樺丘を登っていました。甘樺丘は飛鳥村や大和三山が一望できる高台で、その昔蘇我氏の家屋敷があったところです。丘の頂上から見える風景は今も1400年前も変わらないのどかな日本の原風景。吉村さんから

「よう登ったな、おつかれさん。はいごほうびや。」
と一人ひとりに飛鳥ルビーという特産の苺の入った飴をいただきました。
「ありがとうございます！」「わあ、おいしい。」(包みの裏面の成分表示を読んで)自然の物しか入っていない、いい飴だね。」
日頃から口に入れるものには注意を払う学園の子どもらしい発言が聞こえてきたので笑ってしまいました。



丘を降りて向かったのは日本最古の仏教寺院と言われる飛鳥寺です。その近くに「乙巳の変」で殺害された蘇我入鹿の首塚があります。吉村さんはこの日のために資料を集めよく研究されたようで、首塚の前で子どもたちに「乙巳の変」の一部始終を劇仕立てで語ってくださいました。すでに教室で聞いた話ではあっても、吉村さんが表現豊かに語ってくださったので、皆熱心に耳を傾けていました。当時の宮は、はるか彼方に見え、それはかなりの距離です。

「ここまで首が飛んできた？すごくない？」
と伝説の物語の現地にいる実感を味わっていました。

日本最古の仏像が1400年前からずっと同じ場所に座っておられるという飛鳥大仏の説明を聞きながら参拝した後、徒歩で次に見学する遺跡に向かう間も吉村さんはご自身で集められた本を見せながらいろいろなお話をしてくださいました。

バスに乗り、次に着いたのは石舞台古墳です。巨大な花崗岩を組んで造られた石舞台。蘇我馬子の墓だったと言われています。誰が、何の目的でここまで墓を裸にしたのか？そもそも一体こんな大きな石をどうやって運ぶことができたのか？飛鳥は謎の多いところです。



見学後に石舞台バス停近くの広場でのお弁当時間、またもや吉村さんから差し入れを頂きました。

「みかんをひとつ、どうぞ。」

「あっ、ありがとうございます！」

至れり尽くせりの吉村さんのお心遣いに子どもたちも「吉村さん、優しい！」「いただきます！」「みかん、美味しい！」

と大感激。その後も和気藹々と語り合いながら次の見学地へと移動しました。

最後に見学したのは高松塚古墳です。古墳の周りを歩いたあと、隣接する施設の中で復元された内部を見ました。4年生の郷土学で方位を学んだ時にノートに描いた朱雀を除いた「四神」の絵が復元されており、子どもたちはじっくりと見入っていました。

高松塚古墳からバスに乗って飛鳥駅に向かうのですが、その前に吉村さんとはお別れです。お別れを惜しむ間もなくこちらのバスが来てしまい、慌ただしいお別れになってしまったことは心残りでしたが、皆バスの中から吉村さんに手を振り、感謝の気持ちを表していました。

飯田さんと吉村さん、このお二人との出会いはまさに貴重な旅先の一期一会の機会だったと言えるでしょう。

この後も、唐招提寺、法隆寺と貴重な歴史的遺産に触れることができた今回の旅。生きた歴史の学びであり、子どもたちの心に残る良い旅だった、と今振り返って思います。



マルティン祭

2年生担任 河辺 美華

11月14日(金)に、横浜シュタイナー学園では恒例となっているマルティン祭が行われました。マルティン祭は、日本ではありませんが、ドイツをはじめとしてヨーロッパ各地では、聖マルティンの命日とされる11月11日にお祝いされる伝統行事とのことです。学園では例年、11日を過ぎてすぐの金曜日に、1、2年生の行事として行っています。

この日は、子どもたちは、通常授業の後、一度帰宅してから夕方に、親子で再び、学校に集まります。学校は、すべての電気を消し、最低限のろうそくの光だけを灯して子どもたちを出迎えます。子どもたちは、いつもとは違う学校の様子に、緊張しながら集まります。そして、暗闇の中、ランタンにろうそくの火を灯し、日が落ちて暗くなった校庭を歌いながら列をなして歩くのです。

子どもたちは、この日に向けて「一年の中で一番昼が短い冬至に向かって、段々と日暮れが早まる中、心に光を迎えるための家を作る男の子」のお話をモチーフに水彩を描きました。そしてその紙をランタンに仕立てて準備をしてきました。

2年生担任である私は、今年、教師としてこの準備に携わって2年目になります。けれども、昨年と今年では、大きく違うことがありました。新型コロナウィルスによる感染症の流行以降、数年の間、1、2年生クラスが別々で行っていたこの行事を、今年は、久しぶりに合同で行うことになったのです。我がクラスの、子どもの数は15人。昨年は、私のランタンの灯を入れて16個だった光が、今年は、1年生16人と1年生の担任の灯が合わさり、倍以上となったのです。去年の倍の長さが連なるランタンの光のパレードは、校内から見守ってくださっていた保護者の皆様の目には、きっと、とても明るく、美しく映ったことだと思います。子どもたちにとっても、普段は休み時間に友達と鬼ごっこをして走り回っている校庭が、星空の下、自分たちが作ったランタンの光で包まれている光景は、きっと忘却がたいものとなつたことでしょう。



ランタンウォークの後は、1年生、2年生はそれぞれの教室に分かれ、ランタンの光を、一つ一つ、担任に消してもらいます。明るく美しく輝いていた光が消えていく時間もまた、子どもたちには特別なひと時で、「ああ、消えちゃう…。」という小さな声が聞こえてきました。

そして、これまで毎日、エポック授業の中で繰り返してきた聖マルティンのライゲンを行いました。ローマの兵士だったマルティンが、雪が降る寒い日、十分な防寒具もなく凍えている貧しい男の人をみつけ、自分の大切なマントを半分に切り裂いて分け与えたというお話をもとにしたものです。観せるための劇ではないため、これまでの日々の取り組みも、練習などでは決してなく、1回1回を大切に歌い動いてきました。この日は保護者の方の温かい目が見守る中、子どもたちもより真摯な気持ちで取り組むことができたように思います。

そして、最後に、お母さんたちが準備してくれていたパンをみんなで食べました。マントを半分に切り分けたマルティンになぞらえて、二人で一つのパンを分け合って食べるのです。素朴なパンを、何もつけずに質素に頂くだけなのですが、分け合って食べるからか、なんとも味わい深く、おいしく感じられました。

2年生は、聖人伝を学ぶ時期で、聖マルティンのお話を授業でも聴いてきました。マルティンは、他者と戦う強さより、弱い立場の人のために行動する強さを選んだ人です。今夜のランタンの光は消えてしまっても、私たちの心にはその光が残っている、その心の光で、マルティンのように、世界に明るさを分けることができますように、という祈りとともに、このお祭の幕を閉じました。

今年のマルティン祭は、例年とは違うことがもう一つありました。オイリュトミー専科の猿谷先生の、ドイツ時代のオイリュトミーの師である、ルート先生とそのご主人がご見学されたのです。子どもたちが帰った後、私たち教員に感想を伝えてくれました。ご主人は、お名前をマルティンさんというそうで、子どもたちの歌う「聖マールティン、聖マールティン」という歌を、「私の歌だ！」と嬉しそうにお話くださいました。ルート先生は、子ども時代にこういった体験ができるることは、子どもの魂に、どれだけの栄養となることだろう、とお話くださいました。日々の授業に加えて祝祭の準備をすることは楽なことではありませんが、子どもたちの心に何か残すことができたのだとしたら、これ以上の喜びはないと思いました。

2学期末の「学期祭」では1年生から9年生までの子どもたちが登場し、これまでに学んできたことを教職員、保護者、他学年の子どもたちに見守られながら披露します。

学年が上がるごとに変化する体つき、動き方、そして発表内容から子どもたちの成長を喜びをもって受けとめていく貴重な機会となっています。



1年生 英語の授業より
 〈歌〉 "This Is The Way We..."
 〈手遊び〉 Roly Poly 他



2年生 中国語の授業より
 〈手遊び〉 切土豆
 〈朗読〉 漢詩・天気
 〈リズム〉 方向ゲーム 他



3年生 オイリュトミー
 - 幾何学フォルム ブルグミュラー「アベマリア」
 - 詩 金子みすゞ「みんなを好きに」他



4年生 英語の授業より
 〈歌〉 Let us Endeavour
 〈詩、綴り〉 The Sun Says I Glow
 〈頭韻の詩〉 Forge Me with Fire



5年生 オイリュトミー
 - 詩 良寛「私はどこから来て ...」
 - 調和の8の字 バッハ「フランス組曲 第5番アルマンド BWV 816」



6年生 オイリュトミー
 - ベートーベン「WoO69 パイッジエットのテーマによる9つの変奏曲」より
 - ベートーベン「バガテル 作品33-2 ハ長調」より



7年生 音楽の授業より
 - リコーダーアンサンブル・器楽合奏
 - ロシア民謡「コサックの子守り歌」
 - 林光「古いてがみ」



8年生 英語の授業より
 - 日記



9年生 体育・音楽の授業より
 - ボディーカッション
 グリーグ「山の魔王の宮殿にて」



合同合唱 - ウクライナ民謡「鐘のキャロル」
 - 菅野よう子「花は咲く」 ほか

横浜シュタイナー学園 ~ Newsletter 第172号~
 2025年12月26日発行

編集：広報の会

発行：NPO 法人横浜シュタイナー学園

<https://yokohama-steiner.jp>

〒226-0016 横浜市緑区霧が丘3丁目1-20

TEL 045-922-3107

※掲載内容の無断転載をお断りします